一般演題

P-041
臀部に生じた原発性皮膚ノカルジア症の1例
○鈴木 聡重1, 篠田 大介1, 下山 隆也1, 早稲田 のぞみ2, 沢田 佳浩1, 澤田 智宏3, 五ノ井 隆2
1帝京大学病院皮膚科, 2千葉大学真菌学研究センター 微生物資源分野
32歳、婦、初診2週間前より臀部に腫瘍を自觉した。明らかに外傷歴はない。初診時、腫脹、压痛を有する直径20mm程の表面紫红色、なららに隆起する、やや境界不明瞭な腫瘍を皮下に触れ
炎症性粉腫を疑い摘出。病理所見は真皮から皮下組織にかけて小潰瘍や、多数巨細胞を含む肉芽組織を認めた。小潰瘍内には菌斑を覆う所見を認めた。Grocott染色、Ziehl-Neelsen染色は陰性、Gram染色では陰性菌の所見が得られた。当初、粉腫を疑って手術を行ったため、治療等は行っていなかったため、パラフィンブロックより資料を採取し、分子生物学的手法により菌の同定を行った。DNAを抽出し、一般的に使用されている16S rDNA遺伝子解析用プライマーを用いてPCRを行ったところ、バンドが検出された。シーケンスを行い、得られた塩基配列をBLAST検索にかけたところ、Candida thailandicaとの同定性が98%であった。C. thailandicaは原発性の腫瘍であるため、今回解析した範囲では原因菌はC. thailandicaである可能性が高かった。以上より、原発性皮膚ノカルジア症と診断した。

P-042
舐鰓カンジダ症の2例
○加茂 真理子、杉浦 丹
静岡市立清水病院 皮膚科
テルビナフィンのカンジダに対する最小発育阻止濃度（MIC）は内服、外用とも幅広く、大きい。そのため、テルビナフィン無効例も存在する。今回われわれはテルビナフィン内服療法に生じた舐鰓カンジダ症とテルビナフィン内服療法に生じた舐鰓カンジダ症を経験したので過去の報告例とともに報告する。

P-043
Microsatellite解析に基づいたカンジダ症とCandida albicans genotypeの関係
○高木 雄史1, 深野 英夫1, 田中 琉子2, 矢口 貴之3, 神戸 敏夫1
1愛知学院大学 頭髪外科学, 2千葉大学 真菌学研究センター, 3名古屋大 神経免疫・薬剤分子医学研究センター

P-044
Candida glabrata由来温度感受性変異株を用いた必須遺伝子の分離・同定システムの確立と応用
○竹川 大治, 宮川 洋三
山梨大学 木工学
病原性Candida属酵母においては、C. albicansおよびC. glabrataの全ゲノムシークエンスが2004年に公表され、中山ら（Microbiol, Infect Immun）により必須遺伝子の解釈に有用なTETシステムがすでに開発されている。なかでも、一定温度で増殖するため遺伝子の解析が容易とされるカンジダ症患者からの分離株由来のC. glabrataは、病原性Candida属酵母の分子生物学的解析の材料としてきわめて有用である。こうした背景から、本研究では新規の抗真菌剤開発を展望し、次の戦略に基づき、その標的選択を確認すべくCandidaの分離・同定のためのTETシステムを確立した。本TETシステムでは、低温で正常に生育し、高濃度（発育制限濃度）においては生育不可となる多数の温度感受性（TS）変異株の分離をプラットフォームとする、各TS変異株を宿主とし、親株由来のGenomic DNA LibraryをDNA供体として形質転換をおこなうことにより、TS変異株に対する非移物を有するDNA断片が取得された。非移物DNA断片の必要性は上記のTETシステムにより確立することが可能である。われわれの確立したTETシステムを用いることにより、細胞周期、シグナル伝達、スプライシング、分泌、死形成、Cell Wall Integrity等の機能を損う多数の必須遺伝子群が分離・同定される。これらの必須遺伝子群は今後の抗真菌剤開発における標的抜群として期待される。